

## 巻 頭 言

### —私と研究報告—

生物資源科学部長 荒瀬 榮

Dean, Prof. Dr. Sakae ARASE

生物資源科学部研究報告も今年で17号となる。投稿されました先生方ならびに発刊のためにご尽力頂きました学術委員会の皆様と事務グループの皆様には厚くお礼を申し上げます。

退職までの年数が残り少なくなって、研究報告にこれまで何編の論文があるか調べてみた。1号（平成8年）から16号（平成23年）までに共同研究も加えると10編の論文が掲載されていた。旧雑誌である農学部研究報告も調べてみると12号（昭和54年）から29号（平成7年）までに10編が掲載されていた。初めての論文は、奉職前の昭和50年の9号に掲載されている。「疫病罹病・疫病菌培養濾液処理ジャガイモ組織の電子顕微鏡による観察」という11頁の論文である。ジャガイモが疫病菌というカビの侵入を受けると品種の中には、被侵入細胞が急激な壊死を起し、他の健全組織を犠牲的精神で守るという現象（過敏細胞死、現在はアポトーシスという）が知られている。電子顕微鏡で壊死細胞の微細構造を観察することを目的に取り組んだ卒論研究の一部を論文にして頂いた。私の卒論研究の成果の証しとなる貴重な論文である。生物資源科学部研究報告の最初の論文は、4号（平成11年）に掲載されている。「Response of the Sekiguchi lesion (*sl*) mutant, cv. Sekiguchi-himenomochi, to *Magnaporthe grisea*」という6頁の論文である。疑似病斑形成変異イネの示すいもち病抵抗性を解析することにより、野生型イネのもつ病害抵抗性機構を明らかにしようとして始めた研究の初期の論文である。これまでに掲載させて頂いた20編の論文を今読み返すと不思議なことに、いずれの論文も当時の私自身の研究状況あるいはどんな研究を計画していたかなどを思い出させてくれる。また、当時の研究の未熟さや甘さを反省しながら研究報告を読み返しているうちにおもしろいテーマを思いつくこともあり、研究報告といえども捨てたものでもないなと思うことしきりである。

審査誌と違って研究報告には、投稿に当たっての細かな規定があるわけではないし、審査によるリジェクトがあるわけでもない。従って、審査誌或いはインパクトファクターを教員の業績評価や昇任人事の折に重視するようになってからは、此の手の学内紀要などは幾ら数を書いても評価されることはなくなった。かつて、研究報告の価値を高めようとして、外部審査員制を導入してみてもという話もあった。現在の研究報告は、教員の1年間の

活動記録を残すための業績書という利用のされ方が色濃く出ている。これを否定する気はないが、一年の活動を振り返った時、何もないということだけは避けたいと思っている私にとっては、研究活動の証しを論文として残せる貴重な学術誌となっている。しかも、筆頭あるいは責任著者となる論文の多くは、英語で書いてきた。これは、島根大学に奉職後に審査誌に初めて論文を投稿する折に大学院時代の恩師である西村正暘先生より“外国人にも読んでもらうためには英語で書いておいた方がいいよ！”と言われたことが強く心に残っているからである。以来、雑誌の優劣に関係なく投稿論文は英語で書くように努めてきた。審査誌に投稿した論文に研究報告の論文を引用しておく、海外からその別刷の請求をされることもある。また、海外の研究者が研究報告の論文を引用文献に入れた論文を目にすることもある。この様な時は、研究報告という一紀要でありながらも引用に値する論文として評価してもらったと勝手な解釈をして自己満足している。研究報告ではあるが投稿しておいて良かったと実感するときである。最近、別刷の交換などはほとんどしなくなった。多くの人に研究報告に掲載された成果を知ってもらうためには、ネット上で簡単に閲覧できる工夫も必要ではないかと考える。

先にも述べたが、退職まで残された時間は少なくなった。まだ論文にしていないデータもある。また、退職までに“これだけはぜひやっておきたい！”と思うやり残した研究もあるが、最近、自分で実験する時間が取れない。ガラス室に出かけて植物の生長を見るのが関の山で、空いた時間に実験をするなどということは至難の業でもあるし、“そんなことをしている時間があるの？”とお叱りを受けそうでもある。ならばと思いついたのが、まだ眠っているデータを論文にすることである。これぐらいは出来そうではないかと思いついている。研究報告も、その投稿先の一つになるであろう。

最後に、歴代の学部長が巻頭言にどんなことを書かれているかが気になり読んでみた。10～12号（平成17年～19年）に柴田先生、13号～16号（平成20年～23年）に谷口先生が書かれている。いずれも、大学情勢、学部情勢等の格調高い文書で、私にはなかなか書けない内容である。私事を書かせて頂き、任を果たさせて頂いた。ご容赦をお願いしたい。